
薄紅の花

杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薄紅の花

【Nコード】

N2075R

【作者名】

杏

【あらすじ】

桜の花それは・・・。

プロローグ

薄紅色をした花。

それは、淡いピンク色をした春に雪のように舞う花。

その名は——桜。

私のとって思い出の塊のような花。

あの人が私を助けてくれたときに舞っていた花。

あの人と私がわかれた場所。

あの人との思い出の場所。

二人で

笑いあったり、

涙を流したり、

した場所。

いつも、私を見守ってくれていた花。

いつも、私と一緒に笑ってくれていた花。

いつも、私を慰めてくれた花。

そんな桜の花は今では嫌いな花。

なぜなら、桜という花が無かったらあの人と別れなくても済んだか

もしれないから。

でも、心のどこかでは違うと言っている。

もしかしたら、私のせいかもしれないと・・・。

プロローグ（後書き）

どうでしたか。

できたらしばらくお付き合い合ってください。

闇夜

バシャー。

私は何が起こっているのかわからなかった。

黒みがかった赤い液体が飛び散って、

目の前には小柄な人影が刀のようなものを持って立っている。

何かの首が私の目の前のころが見込む。

「――っ」

私は声にならない叫びをあげながら後ずさる。

本当は私が倒すはずだった妖の首が。

しかし、私には出来なかった。無理だったのだ。

私は倒せなかった。

母のように冷酷に。

姉のように素早く。

二人のように華麗に

それをこの人は成し遂げたのだ。

誰かもわからないこの人が。

剣を華麗に舞うように扱い、妖を弄び、素早く、美しく。

それに私は見とれてしまう。

その間にこの人は倒してしまった。

私にはそれが無理だったのだ。妖を倒すことも、母や姉のように倒

すことも。

もう私には無理だ。

こんなこと出来ない。

ヘナリと座り込んでいる私はあまりにも見苦しい姿。

でも、動けない。

恐怖とショックで。

絶望で。

そんな私を妖を倒した人は見てきた。

醜い私を。

見ないでほしかった。

こんな自分を誰にも見てほしくない。

なのにその人は手を差し伸べてきた。

「大丈夫ですか？」

その声はあまりにも優しく、氷のように冷たかった。

手を差し伸べられても手を取れない。

なぜかは分からないが手が震えて動かない。

それを理解したその人は私を抱いた。

それはどう見てもお姫様抱っこ。こんなことをされたのは初めてだ。

鼓動がドクドクと速くなる。

顔を赤らめながらその人の服をぎゅっと握った。

その人の体温は温かい。

このまま抱かれていたい。

でもそれはできない。

なぜならこの人はきっと私のライバルになる可能性が高いのだから。

恋？

目を覚ますと部屋にいた。

目の前にはお姉ちゃんがいた。

お姉ちゃんは私とは違い、大人っぽい雰囲気を持っている。

「おはよう、紫音^{しおん}。やはりあなたには無理だったね」

「・・・・・・」

それは私が一番言っただけではない言葉だった。

とくに尊敬しているお姉ちゃんには。

そんな諦めたように言われてほしくない。

私だってお姉ちゃんと一緒に妖怪退治の家に生まれてきたんだから。

「しかもあんな人に連れて帰られて」

私はその言葉を聞いて悲しくなった。

理由は分からない。

でも悲しかった。

それでも反論の言葉が出なかった。

「いい、紫音。あの人と会っても、声かけられてもはしちやだめよ」

この時のお姉ちゃんの顔はひどく冷たかった。

それでも私は言わなければいけない言葉が一つある。

「何で？とてもいい人だったよ」

そうあの人は未熟な私を守ってくれてここまで送ってきてくれたのだ。

「それは・・・・」

お姉ちゃんは言葉を濁す。

何か誤魔化すかのよう。

「たとえばお姉ちゃんでも納得できないということ聞かないよ」

「と、とにかくあなたはあの人に近づいちゃダメ。あと、今日の夜は絶対外に出てはいけないわよ」

バン。

障子を勢いよく閉める音がした。

「母さん、紫音が」

何かを乞うかのように私は母を見た。

「ええ、分かってるわ」

母は憎たらしいものを見るかのような目で窓から空を見た。

「紫音は恋をしてる。しかも好きになってはいけない人物とそれは何かを吐き捨てるような口調だった。

「どうするの、母さん？」

「仕方ないわ。しばらく貴女が紫音のもとについていなさい。あのようだときつと夜、外に出ると思うから」

「はい」

紫音。

貴女も恋する年頃。それには私も賛成。
でもね貴女が会った人に恋するのはやめて。
あの人は悪魔なのだから。

らしくない事

我ながららしくないことをしてしまった。
女の子を助けるなんて。

しかも妖怪退治の名門の藤岡家の娘を。

こんなことが知れたらおじい様にお仕置きを受けるだろう。

「だからお前はダメなんだ」と。

「お前の兄はできていたことがなぜできないんだ」と。

たしかに俺は兄貴に弟だ。

でも俺は兄貴とは違うのだ。

おじい様はなんで自分で追い出した兄貴のことを引きずるのだろう。
フツ。

俺はかすかに笑った。

なぜならそんなこと分かりきっているから。

たとえ俺のほうが優れていても、俺には一番足りないものを持って
いたからだろう。

それは冷酷さ。

俺はまだ優しすぎるとい事だろう。

兄貴のような、俺をここに捨てた父さんのような冷酷さが。

自分の不利益な事だったら家族でも友人でも見捨てる冷酷さが。

それが一番自分には足りないもの。

この鬼の一族には一番大切なもの。

なのにおじい様は兄貴ではなく俺のほうを取って兄貴を捨てた。

こんなに優しすぎる鬼はいらないはずなのに。

女の子と捨てきれなかった鬼なんていらないはずなのに。

鬼になりきれない自分は死んだほうがましなのに。

中学登校にて

ここ私立桜ノ宮中学校ではガヤガヤダラダラと女子生徒・男子生徒が登校している。

その中にはもちろん私もいる。

この学校は私立——つまり金持ちや頭のいい人が通う学校のだ。しかし時々そのように金持ちでもなく頭が良くもない生徒もいる。それはただのこの学校の理事長趣味嗜好だ。

そして私もその中に入っている。

私の家は由緒正しいと言えば正しいがほとんどそれも薄れてきている。

現在は普通の家のような生活をしている。

トン。

後ろから肩を叩く人物がいた。

それは——

「おはよう」

私の友達の宮下茜だ。

茶髪のショートカットで幼い顔立ちをしている。

「うん。おはよう」

「そう言えば知ってる？この前の期末テストで全教科で万点取った人がいるんだって」

期末テストとはどの学校でもあるテストと同じだ。

しかし同じといってもほかの学校とはレベルが少し違うのだ。

そのため全教科満点なんて夢のまた夢ってえっ？

万点取った人がいる？

そんな馬鹿な。

それが顔に出ていた私を見て茜は笑った。

「本当みたいだよ。しかも私たちのクラスにいるみたいだよ」
まさか私のクラスにそんな頭いい人がいたなんて……。

「確か名前は桜沢結斗さくらさわゆいとって言う名前だったかなあ」

「そんな名前の人がいたっけ？」

「不登校なんだって。もしかしたら物凄いオタクだったりして」

「あー。分かるかも。そういう人に限ってオタクの人いるよねえ。」

にしてもこの中学校にもいたんだね不登校って。よく理事長も許したね」

「なんか逆らえないんだって」

「へー。なんかそういうのよくありそー」

「実際ここにあるけどね」

私は茜の言葉を聞いて笑った。

そっれきり桜沢結斗という人の話をするとはなかった。

しかし数日後その名を聞くことになる。

そんなことこの時の私たちは考えもしなかった。

そしてその男の子が私を助けた人だと言う事も。

頼みごと

私と茜の二人は簡単に書かれた地図を持って歩いていた。私の片手には分厚い紙束を持っている。

周りは和風の家ばかりだ。

そんなところを歩いているのは訳がある。

それはほんの数分前の出来事だった

「数分前」

「お願い!!」

私はそう言われて帰る準備をしていた手を止め、顔をあげた。

その声は私の友達、霧沢静寂きりさわしじまのものだった。

きれいな長い黒髪。

すらっとした体。

それは女子の私でも見とれてしまうほどの美しさを持っていた。

そんな彼女が私に手を合わせ頼みごとをしていた。

「何？」

「今日結斗のところによって欲しいの。急に用事が出来たから・・・」

「」

結斗？

聞いたことのない名前だ。心当たりのない人の家に何てよれるはずがない。

なので断ろうとした時。

何か引っかけた。

何かはわからないが、この名前を最近どこかで聞いたことある気がする。

「今から地図書くから。頼まれて」

私が悩んでいる間に静寂はほとんど話を進めている。

この状況からするとうけなければならぬだろう。

しかし結斗という名前に心当たりがないのだ。

仕方ない聞いてみようかと決心した私は口を開いた。

「ねえ、結斗って誰？」

そう聞くと静寂は驚いた。

「知らないの？この前のテストですべて万点取った人だよ。桜沢結斗だよ」

そういわれて私の中のピースがすべてはまった。

そう、この前、茜と話していた人物ではないか。

「うん、わかった」

そう頷いて地図を受け取った。

「お願いね」

そして今に至る。

ピタッ。

「あ、ここだね。って、でかつ」

茜が叫んだ。

その通りデカかった。

私の家もデカいがそれ以上に出かかった。

古風の門には『櫻沢』と書かれた物が立てかけられていた。

櫻沢家にて

ピタッ。

人の気配がする。

静寂か？

いや、違う。

これは別の人物だ。

1人はこの前、助けた人物のようだ。

その瞬間自分が心の中から笑ったのがわかった。

まさかまたもや会うとは。

そう思いながら2人が来るまで待つことにした。

「押す？」

「う、うん」

私と茜の二人は恐る恐るインターフォンをおした。

ピンポーン。

ビクッ。

私たちの体が小さく体が震えた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

誰も出てこない。

「・・・・いないのかな？」

そう思った時・・・。

ガタッ。

ビクッ。

私たちの体が震えた。

「結斗様に御用ですか？」

そういつて出てきたのは美しい女性だった。

着物の上にエプロンという大正時代の使用人のような格好をした女

性だ。

茶髪の髪を一つの束ねたその髪型も古風な格好も彼女の容姿に会っていた。

「えっ、はい」

ニコリと女性は笑い、一言「どうぞ」と言った。

家にはいるとそこはまさに別世界であった。

まるで昔にタイムスリップしたみたいだ。

「桜沢さんってどんな人だろうね」

茜は弾んだ声で話す。

「ここです。結斗様入ります」

そういうと一度座りゆっくりと障子を開けた。

「いらっしやい」

そこにいたのは・・・私を助けてくれた人だった。

櫻沢家にて 其ノ弐

まぎれもなくあの桜が散る夜に助けてくれた少年だった。
闇の色に似た漆黒の髪。

どこか儚げにも見える黒いまなざし。

全てが黒の闇に溶け込んでしまいそうな雰囲気。

それは間違いようがないものだ。

私はそんな彼を呆然と見た。

俺は二人の驚いた姿を見て笑みが出た。

俺らしくない笑みが。

俺はすぐに人懐こそうな笑みを浮かべ呆然としている二人にゆつくりと近づいた。

そうして藤岡家の娘が手に持っている分厚い紙の束を眺めた。
もう一度二人に優しくそんな笑みを浮かべる。

「これを静寂しじまの代わりに届けに来てくれたんだね？有り難う」

そういうと二人はコクリと頷いた。

そのさまはかわいらしい以外に何も言えない動作だ。

「本当にごめんね。なかなか身体が弱くて学校に行けないものだから・・・」

ブンブン。

次は二人が首を横に振った。

まるで首だけを動かすしか能がない人形のようにも見えた。

そうして静寂な時間が流れ二人は帰って行った。

本当にびっくりした。

まさか桜沢結斗が自分を助けてくれた人だったとは。

茜も別の意味でびっくりしていた。

きつと予想以上にイケメンだったからだろう。

それは言うまでもないだろう。

あの人の整った顔立ちに漂わせている雰囲気はうちのクラスの人とは比べものにもならなかった。

あんな芸能人に居そうな・・・いや芸能人でもあんな不思議な雰囲気を漂わせている少年はいないだろう。

どこことなく異世界のようなそれでいて優しそうな落ち着いた印象があった。

あんな人が自分のクラスにいるとは思わなかった。

そう考えているうちにいつのまにか茜と別れ家についた。

そうして考えた。

夜、またあの人——桜沢結斗に会えるだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2075r/>

薄紅の花

2011年5月8日13時39分発行